

### 三 戦時下の学生生活と研究

#### ◆ 学生寮の確保と総長懇談会

学生生活も困難を究めていました。第一次大戦後の重工業化につれて、名古屋も工場労働者数が増えましたが、それに対応できる住宅施設の整備は整っていませんでした。ましてや学生を対象とした下宿は、戦時下ということもあって、恒常的に不足していました。洪沢は、この下宿不足の対応にも努力し、一九四二（昭和一七）年一月に空き家を借り入れて、十数名の学生を入寮させました。「すくすく伸びよ」という意味で洪沢自ら「菁々寮」と命名し、また論語の「進吾往也」や陶淵明の「園日涉以成趣」を書にした掛軸を寮に贈って掲げるなど、洪沢が寮生によせた期待の程がうかがわれます。

洪沢はこの際、「学生と共に豚鍋でもつき合い懇談会を開いて余も本学建設の抱負から体験談など語り、また学生諸君からも希望や意見をきく機会を与えたならば相互に意志疎通の道を開いてこの困難なる時局下の教育に資する所あらん」と考え、この寮内で学生との懇談会を開催しました。学生から「総長懇談会」と名付けられたこの会は、二月二一日に第一回が開か



【図12】学生寮に掲げられた洪沢の直筆の書「進吾往也」(左、市川茂雄氏提供)と1942～3年頃の総長懇談会(右、本多重吉氏提供)

れ、七月まで約十数回開かれたそうです。のべ二百名余りの学生が参加しており、また教授・助教も参加し、食費は洪沢のポケットマネーから支払われたそうです。

しかし寮では狭くて一回に十数人ほどしか参加できず、一年から三年生の全学生にまで行き渡るには回数を数多く重ねなければなりませんでした。それはただでさえ多忙な洪沢にとつても負担であり、また豚も思うように得られなくなってきたようでした。そこで翌年からは総長懇談会は本部会議室で開催されるようになり、一回に約四十名ほどを集めて、今度は弁当を食べながらおこなわれたようです。毎回同じような話をするので、そこで洪沢は、その内容を書いた小冊子『我等の学園』を学生に配付し、懇談会ではこれに説明・補足を加えるような形で



【図13】1942年頃 理工学部での軍事教練（本多重吉氏提供）

話をしました。このようにして、学内の人的交流の活発化をはかっていったのです。

#### ◆軍事教練と勤労働員

名古屋帝国大学が創設された一九三九（昭和一四）年は、大学などの高等教育機関の学生生徒に対する軍事教練が強化された年でもありました。軍事教練は毎週二時間の必修となり、各個部隊教練・射撃・指揮法からなる術科（実地教練）と戦史・戦術・軍事講話からなる学科が教えられていました。

これについて渋沢は、だいたいつぎのように回想しています。

これ以前東京帝国大学にいた頃は、軍はたしかに実地教練をすることを要求してきただが、大学側は、高等学校までに実地教練

を修得してきたのだから、大学においては将校としての学科だけにしたいと主張した。結局学生が数千人もおり実地教練は実行不可能であったため、大学側の主張通り学科だけを行っていた。しかし名古屋帝国大学においては学生数も少なく、また愛知医科大学時代から実地教練が行われていたため、前記の軍事教練の強化指令はかなり厳格に守られていた。しかし、学生は本来の医学・理工学に関する専門技術実習に相当の時間をかけるため、軍事教練に時間を多く割くことはできず、またしなかった。そのため学生に軍人と同様に教練を要求する軍査閲官の場合、その講評はきわめてかんばしくなかった。

この渋沢の回想から、この当時の戦時下における軍と大学（ないしは大学人）との微妙な関係がみえてくるようです。

勤労働員も一九四一（昭和一六）年頃からはじめられています。一・二年生が、七月に東山キャンパスにおいて整備作業に、一〇月には高蔵寺の陸軍補給廠（現春日井市）で擲弾筒製造作業に動員されています。勤労働員が本格的になったのは一九四三（昭和一八）年頃からで、前年末から一月にかけて、臨時附属医学専門部の学生が防空監視所の建設工事に動員され、また各学部の学生が高蔵寺の飛行場建設作業に従事していました。秋には医学部学生の勤労作業として、名古屋造兵廠従事者の血液検査を実施しています。

名古屋帝国大学としては、勤務先が名古屋地方の場所であること、高学年は医・理・工のそ



【図14】1942年頃 医学専門部学徒報国際の  
無医村診療奉仕活動(石橋正氏・吉川一弥氏提供)

の特技を生かせる業務・職場を選び、低学年はそれ以外の業務・職場に従事することは止むを得ないとするものの期間は二ヶ月以内、という方針をもっていました。しかし渋沢の回想によれば、勤労働員においてなるべくその特殊技能を活かせる科学的奉仕ができるよう配慮したが、緊急を要する場合は単なる労力奉仕も避けられなかったといえます。またその作業内容についても、たとえば飛行場建設作業の際の設備が「原始的なる」もので、これでは人力が多くかかるため、機械化をして人的動員を節約する方法も考えたが、

資材がなく断念せざるを得なかったと悔やんでいます。勤労働員においても理工の学生にふさわしい機械化された作業内容であつてほしく、かつ機械化によって勤労働員を少なくして、本来の研究にもどれるようにと考えていたのでしよう。

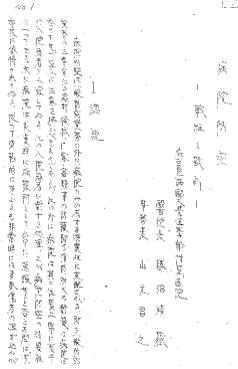
なおこのほかにも、文部省の指導のもとに、学内にあつた校友会が「報国会」として再組織され、

また総長以下学生生徒にいたるまで全校で編隊される「報国隊」も結成されました。これらは奉仕活動のほかに、「シンガポール陥落祝賀行事」「勅語奉読式」をおこなうなど、戦時下における国威高揚の役割も果たしていました。

#### ◆空襲と病院防空と研究室疎開

防空対策については、太平洋戦争がはじまった直後の一九四二（昭和一七）年一月一七日に文部省から各学校へ防空計画について報告するよう依頼があり、名古屋帝国大学でも「名古屋帝国大学防空計画」が策定されました。その後、実際に空襲がはじまると、一九四四（昭和一九）年八月には新しい防空計画に改正され、防護団組織・避難計画等が詳細具体的に取り決められていきました。

空襲は一九四四（昭和一九）年末から激しくなりましたが、医学部は附属医院が空襲下の名古屋市民のもっとも重要な治療機関であったため、疎開することがなかなかできませんでした。そのため一九四五（昭和二〇）年三月一二日・一九日・二五日の三度にわたる空襲で、多大な被害をうけてしまいました。医学部関係の建物は図書館を除いてほぼ全焼、附属医院も約半分が焼失し、罹災面積は六三パーセントにも及びました。しかし、前述した防空計画Ⅱ既定の避難計画がしっかりしていたため、三回とも入院患者が直接負傷するような事故はほとんどな



【図15】1945年 医学部空襲跡（左、付属図書館医学部分館提供）と「病院防空一戦跡と戦訓一」（右）

かったようです。

医学部ではその時の状況（戦跡）を教訓（戦訓）とした「病院防空一戦跡と戦訓一」が策定されました。医院長勝沼精蔵と事務長山元昌之が当時のガリ版で作成した冊子が残っており、右肩に「秘」の記載があります。これには水・食糧の備蓄と配給、防護当直員の配置、連絡用自転車・物品運搬用の木炭自動車の確保などのライフラインの維持とともに、患者の避難方法や後方病院の用意、防護団の充実など人的問題も指摘されています。

一方この空襲を機に、その対策として研究室の疎開が本格的具体的に進められるようになりました。四月一日には、研究施設などの疎開方針が定められ、翌二日には文部大臣が名古屋帝国大学の被害状況を視察し、疎開を促進するよ

う強調したといわれています。理学部・工学部は、前述の三月の空襲では運よく被災を逃れていました。その後の四月一九日の評議会で研究施設の疎開について話し合われ、短期間に実施されました。その範囲は東海・北陸・長野のほか奈良・新潟まで広範囲に及びます。

ただこの間の空襲では、東山キャンパス付近にあった高射砲の陣地を目標に爆弾が投下されました。そのため東山キャンパスの校舎は直撃はのがれたものの、建物自体が戦時規格のものであったため、振動や爆風により窓ガラスが割れたり、屋根瓦や天井裏が多く落下してしまいました。さらに五月一日の大空襲では、西二葉町の工学部校舎や東山キャンパスの大学本部事務室・学生集会所・理学部生物学教室・航空医学研究所などを焼失してしまいました。しかし先の研究室疎開がこの間短期間ではほぼ終了していたため、物的被害は最小限ですみました。

#### ◆戦時下の研究

一九三七（昭和一二）年七月に日中戦争が全面化すると、文部省では翌年二月に「科学動員協議会」（渋沢もこの委員の一人でした）が、四月には「科学審議会」が、八月には「科学振興調査会」がと、次々に科学振興のための調査審議機関が作られていきました。その結果、翌年三月には文部省の科学研究費交付金が創設されました（初年度は三百万円）。名古屋帝国大学でも昭和十五年度に、医学研究に対して五万円近くの交付金を受けました。また一九四三

(昭和一八)年九月には「戦時科学研究会」が学内に設置され、戦時下に対応する科学研究体制をとっています。

一方戦時下であつても、各学部や学科では独自の研究活動もおこなわれていました。たとえば理学部化学科では「業績報告会」「化学談話会」などの研究会が開かれていました。前者は物理学科の学生も参加しており、軍事研究もわずかででした。後者は研究発表や論文紹介のためにほぼ週一回おこなわれていました。

ただこの時期名古屋帝国大学の研究で特筆すべきは、地域社会からの研究援助です。一九四一(昭和一六)年九月、この地方の科学振興のためにと愛知県知事相川勝六から出された六十万円の寄付金をもとに「愛知県科学技術振興会」が発足、渋沢が学術委員長に就任しました。この会は、航空機関係のほか食糧増産にも研究の重点をおいて、三年間をめぐりに資金を支出して、理工学部のほか高等工業学校や各種試験所の研究援助をおこないました。理工学部は創設当初であり研究費が乏しかったため、これらの資金により相当の研究成果をあげることができました。しかし三年後には、完成の域に近く即戦力に役立つ研究を除いて、打ち切られたようです。このほか戦時科学研究に対しては、おもに奨学資金の名目で民間財団からも多く資金援助や寄付がおこなわれていました。

ところで愛知県科学技術振興会は、単に科学技術の向上という現実的な研究に寄与しただけ

化学談話会 (第2回)

日時 昭和17年11月19日 15時半

場所 名古屋帝國大學理學部化學教室  
第412號室

演題 地球化學と陸水學の進路に就て  
菅原 健 氏

Handwritten notes in Japanese, including a chemical structure diagram of a complex organic molecule with various substituents and a small box at the bottom containing the text "花畑会分館".

Handwritten notes in Japanese, featuring several lines of text and a small diagram or list of items.

Handwritten notes in Japanese, including a list of names and dates, such as "1942.7.20" and "1942.7.21".

郷土科學者傳記叢書 第一編

細胞科學の犠牲者

吉 雄 南 阜

愛知縣科學技術振興會

郷土科學者傳記叢書第一編

尾張本草學の巨擘

水 谷 豊 文

愛知縣科學技術振興會

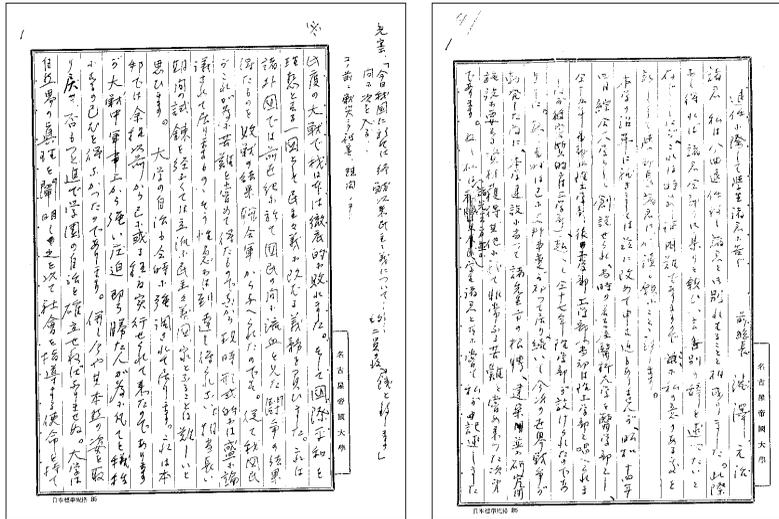
【図16】化学談話会の通知や記録(上、1942年)と愛知県科学技術振興会の刊行物(下、1943-1944年)。山崎一雄氏提供。

ではなく、この地域の科学技術の発展に寄与した歴史的人物を再評価する活動もおこなっていました。たとえば、医学の伊藤圭介、本草学の水谷豊文、化学鉄砲の吉雄南臯の三人を、この地域の郷土三大科学者とし、郷土科学者伝記叢書などを刊行しています。単なる科学発展だけではなく、その背景にある歴史をも探ろうとしているところは、後述する渋沢の歴史への関心と共通するところがあると思われます。

#### ◆総長退任

敗戦後渋沢は、今度は大学復興の基礎作りに尽力しました。敗戦二週間後の八月二七日には、被災状況と復興計画予算を作成して文部省に提出していました。九月一〇日には文部省に赴いて、大臣や関係各局課長と面会、予算はじめ復興のためのさまざまな要求を行っています。GHQ／SCAP（連合国軍最高司令官総司令部）の指示により、航空に関する教育・研究が全面的に禁止され、名古屋帝国大学航空医学研究所が一九四六（昭和二一）年一月に廃止されましたが、その間渋沢は、文部省にその存続を請願し、環境医学研究所への改組を申請していました。その結果、三月三〇日には、環境医学研究所が名古屋帝国大学に付置されています。

このように敗戦後も渋沢はその復興に走り回っていました。しかし老齢と健康上の問題があり、同年一月三十一日総長を辞任することになりました。渋沢は退任の翌二月一日付けで「退



【図17】1946年 総長退任時の「退任に際して学生諸君に告ぐ」原稿

任に際して学生諸君に告ぐ」という文章を残しています。本来は退任式をおこなって、学生全員を集めて直接別れの言葉を述べるのですが、敗戦直後であり学生たちは自身の毎日の生活で手一杯であり、そのようなことは到底不可能でした。そこで洪沢は学部長に代読してもらおう事を願い、このような文章を残したのです。

この文章の内容は多岐に渡っていますが、注目したいのは洪沢が時局が大転換しても、それに冷静に対応して考えていることです。戦中大学の自治が犠牲にされたのは止むを得なかつたと主張する一方で、今後の日本の民主主義については「相当長い期間の試練を経なくては立派な民主主義国家となることは難しいと思います」とみています。そして戦前

から大学建設にあたり主張してきた「以和為貴」「進吾往也」を、この戦後においても一貫として変わらないものとして、大学の自治を確立するために賤別の辞として残しておきたいといっています。また、第一次大戦において航空機とラジオ（電波）が、第二次大戦においては原子力と極超短電波が発達したと、戦争が科学技術の飛躍的進歩をもたらしたと工学者らしく冷静に分析しています。もちろん電波が兵器として使われたことは遺憾至極であり、また原子力が悲惨な災害を蒙らしめたといっていますが、一方で原子力が人類の福祉増進に用いられるよう希望も述べています。このように渋沢は、敗戦後の民主主義の潮流に安易に乗り替えるようなこともなく、相変わらず戦前からの自己主張を継続し、戦争が科学技術の飛躍的進歩をもたらしたことを、価値判断はひとまずおいても、その事実を冷静に述べるなど、当時の「民主主義勢力」から糾弾されかねないような姿勢を平然ととっていたのです。その是非はともかく、ここに彼の考え方を垣間見ることができます。

なお、後任の総長には、前名古屋医科大学学長で当時医学部長であった田村春吉が就任しました。

《コラム》 岡崎高等師範学校（岡崎高師）

岡崎高等師範学校は、理科系中等教員養成のために一九四五（昭和二〇）年四月に設置されました。岡崎市から寄付された旧岡崎市立工業学校の校地・校舎を使用する予定でしたが、入学式直前の七月二〇日深夜の大空襲でそのほとんどが焼失しました。その後、豊川市の旧豊

川海軍工廠工員養成所と同寄宿舎に移転しました。

同校は、一九四九年五月、新制名古屋大学に包括されて名古屋大学岡崎高等師範学校となった後、一九五二年三月末に閉校し、学籍関係や附属中学・高校は名古屋大学教育学部に引き継がれました。この間わずか七年間でしたが、六百名余の卒業生を送り出しています。



【図18】 岡崎高等師範学校（都築亨氏提供）



【図19】机がわりの弾薬箱：戦後、振風寮で使われていました。「岡崎高等師範学校／番号5」というラベルが貼られています。もとは豊川海軍工廠で生産した機銃弾を運ぶためのものが、戦後転用されたものです。中にノート類などを入れ、ふたが机の天板となりました。

丸イス：岡崎高師の化学実験室で使用されたもので、その後東山キャンパスの旧教養部時代まで使用されました。「岡崎高師」の焼印がみられます。(以上、加藤貞夫氏提供)

定規：「岡高師教務課用」と書かれ、裏には「工具養成所」の焼印もあります(教育発達科学研究科提供)。